

# 牛久：学校周辺に見る自然

第29号 みずべ公園

2016年3月28日発行

## ＜ みずべ公園に春が来た！ ～ ガマ合戦 ＞

皆さん、こんにちは。今月15日、ヒキガエルの産卵を確認するためにみずべ公園を歩いてきました。第27号で紹介したように、牛久自然観察の森の「コブナの流れ」では10日にすでに産卵が済んでいました。みずべ公園もそろそろかなと予想していましたが、当たりだったようです。

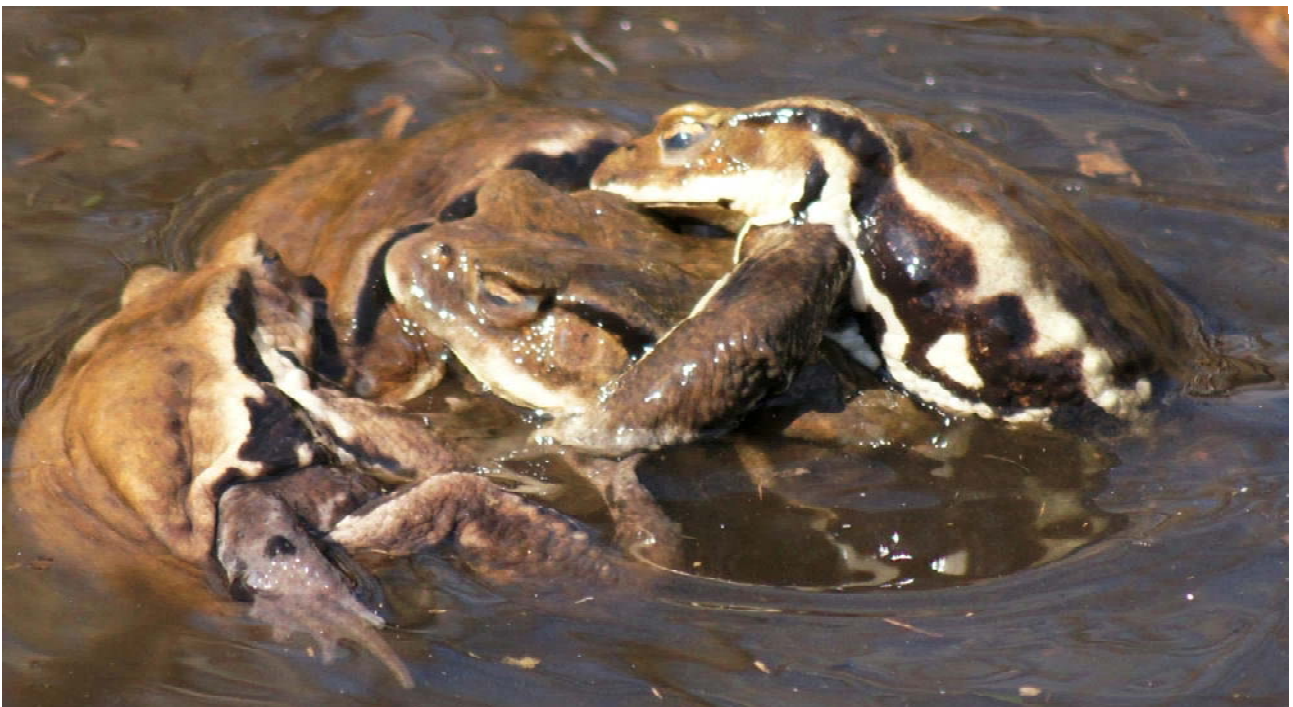


池のあちこちでグーグーと鳴き声がし、水面が波立っていた。この写真に写っているだけでも、15頭のヒキガエルがいる。



ヒキガエル（アズマヒキガエル）は春（3～5月）、すんでいる場所近くの水辺に集まって、3日～1週間で産卵するようです。少ないメスをたくさんのオスが奪い合い、「ガマ合戦」とよばれています。奪い合いに勝ったオスはメスの背中にの乗り、しっかりとつかまえてはなしません。あまりに強くしめつけるので、メスが死んでしまうこともあるそうです。

少ないメスをたくさんのオスが奪い合う「ガマ合戦」。あまりに強くしめつけるので、メスが死んでしまうことも。





メスの奪い合い。ロープ状のものは卵かい(左)。じゃまなオスを足で払いのけようとするが、なかなか離れない(右)。



オスは他のじゃまなオスや、まちがって自分に乗って来たオスを足で払いのけたり、「クウツ、クウー」と鳴いてまちがいを知らせたりします。が、すぐに離れるのは間違いの時だけで、奪い合っているときにはなかなか離れてくれなようです。3～6頭位のかたまりが、波を立てながら右へ左へとゆらゆら流されていきます。

**上に乗っているのがオス。**  
**この時期のオスは、体がツルツルしている。**

おとなになったヒキガエルが水に入るのは産卵の時だけで、ふだんは林の中など陸上でくらしします。だから足に水かきは発達しませんし、草や木に登ったりしませんので吸盤もありません。ジャンプ力も弱く、ちょっとはねる程度です。それで敵におそわれた時には、耳の後ろあたりから毒液を出して追いはらうのです。ところがカエルを専門にねらうヤマカガシというへびにはこの毒がきかず、食べられてしまいます。それどころかヤマカガシはその毒を首にたくわえ、敵から身を守るのに使っているそうです(口の奥にある毒牙から出る毒は自分のだ液が変化したもので、獲物の動きを止めるためのもの)。



ヒキガエルの卵かいです。1組のペアは、一度に1500～8000個の卵を産むそうです。ロープのように細長い寒天状のものは水分を吸って段々と太くなっていきます。が、水の外に産みだされてしまったものは、太くはなれません。このまま水に入れないときはどうになってしまうのでしょうか？産まれた後も多くが食べられたり死んでいくので、オタマジャクシまでになれるのは1割に満たず、さらにそのオタマジャクシも食べられるなどして1年間生き残れるのは数%といわれます。毒が出せるようになると食われにくくなりますが、それでも産卵できるまで育つのはわずかなのです。【理科支援員：宮内】



ヒキガエルの卵かい。黒くまるいのが卵で、まわりを包む寒天状のものが水を吸ってだんだんと太くなる。